

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

不安定だから安定できる (後編)

前号はキレた子どもが教室から飛び出して行った場面までを書きました。先生は彼を追いかけず、タイムアウトを取ることを保障しました。しかし、教室の床には彼のノートや教科書、筆箱からはみ出た鉛筆や消しゴムが散乱しています。少し重複しますが、改めて、片付けの場面から考えていきましょう。

Q1 散乱したものを先生はどうしますか。

- ①そのままにしておく。
- ②教室にいる子どもに片付けさせる。
- ③教師が片付ける。

自己責任という観点なら、散らかした当の子どもが片付けるべきです。①のようにそのままにしておくほうが、教室に戻って来たとき、散乱したものを目にするので、物に当たったことを深く反省するかもしれません。

しかし、自分がしたこととはいえ、惨めな気持ちになります。友達はどう思っているだろうと負い目を感じます。

教室に誰もおらず、授業も終わりならそれもよいでしょうが、そうではありません。彼以外の子どもは問題に粘り強く取り組んでいます。

教室に残った子どもが勉強に集中できる環境をつくるのが教師の役割です。

だからといって、②のように片付けさせると、「なんで自分たちがそんなことをしなければならぬ」と不満をもちます。

この場合、③のように教師が片付けます。しかも「ちょっと待っていてね」と断った後は、黙っ

て片付けます。「手伝って」と頼みません。「仕方がないなあ」とぼやきません。

1 子どもの思いを確認する

黙々と片付ける先生を見て、教室に残っている子どもたちは、自分がキレても先生は文句を言わずに対処してくれると安心します。先生にとっては一人の子どもへの対応でも、他の子どもたちは自分ごととして見ているのです。

Q2 教室に残った子どもたちに何と声をかけますか。

- ①キレたいと思ったことはないの。
- ②君たちはキレずに立派だね。
- ③キレたらダメだよ。

②のように言われたら悪い気はしません。ほめられたと受け取り、嬉しくなります。

しかし同時に、そのほめ言葉は「キレた子どもはダメ」という意味を含んでいます。一方を持ち上げ、他方を下げているのです。ほめてもらった自分はよい子で、キレた子は悪い子というレッテルを貼ることになります。先生にそんな意図がなくても、比較するとはそういうことなのです。

③は、キレた子どもに対しての評価です。キレるには何らかの理由があります。この発言はそれを斟酌するのではなく、キレるという結果だけを見ています。

キレた友達を見て、「どうしてそうなるのだろう。何か理由があるのかな」と、行動ではなく気持ちに寄り添ってみようとしている心優しい

子どもがいます。しかし、教師から「キレたらダメ」と言われると、心情を理解することも止めてしまいます。

①のように聞かれることを、子どもたちは予想していません。キレるというのは好ましい行為ではなく、人前でそんなことをしてはいけないと思っっています。仮にキレたくなくても、そんな気持ちを受け入れてもらえらると思っっています。

ですから、「ある！」と勢いよく挙手する子どもはいません。せいぜい頷いたり、小さく「ある」と口元が動いたりする程度です。

2 子どもの本音を受け入れる

彼らに「どうしてキレないの」と聞くと、「そんなわがままは許されない」「恥ずかしい」と答えます。そして「なんで先生はそんなことを聞くのだろう」といぶかしくります。「もしかして、キレてもいいのかな」と少しホッとします。



教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

Q3

「キレイだと思ったことがある」という子どもの思いを確認した先生はどうしますか。

- ①我慢して偉いね。
- ②お兄ちゃん・お姉ちゃんなんだからキレイなよね。
- ③キレイでもいいよ。

「キレイだと思ったことがある」と正直に教えてくれたのに、①のように返事をするのは、我慢することが美德だと強要するようなものです。それでは、何のために「キレイだ」と思ったことではないの」と聞いたのがわかりません。

「キレイでもいいんだ」と安心している子どもを裏切るような先生の言葉に、子どもは失望することでしょう。

②も、キレイことはよくないことだと子どもは受け取ります。しかも、お兄ちゃん・お姉ちゃんらしく振舞うことを期待されています。「キレイ」という衝動は「子どもらしさ」の表れです。お兄ちゃん・お姉ちゃんらしさを求めることは、子どもの気持ちを否定し、背伸びした行動を要求することになります。

③は子どもにとって意外な言葉です。そんなことが許されるのかと驚きます。

世の中は建前の世界です。自分の気持ちに蓋をして、周りの人に合わせます。

それに対して、家庭は本音を言える場所です。確かに、教室は「世間」ですが、家庭という空間と似ています。つまり、担任が保護者で児童が子どもです。「子どもを理解する」ということは、

「子どもの本音を知る」ことです。それには、子どもが本音を出せる環境が必要です。「この先生なら不満を口にしても諫められることなく、受け入れてくれる」と感じたとき、子どもは教師に心を開き、距離が縮まります。

3 「子どもらしさ」の尊重

子どもは本音で生きるものです。本音を言うことで、他人とぶつかり、言っていないこととそうでないことがあることを経験します。これが大人になるといえることです。それをせずに、大人になってから本音を言うから、「子どもみみたいな大人」になるのです。

そこで「子どもだから我慢できないことがあるよね。今も教室から出ていった友達がいるね。教室から出て行って勉強しない友達がいるのに、真面目にやっている自分たちが勉強させられるのは不公平だと思っている人がいるよね。また、なんで先生は教室を出て行った人を叱らないのか。甘いと思っている人もいます」と、我慢



している子どもたちの気持ちに寄り添います。とはいっても、子どもたちは「キレイとはいけない」と思っています。

先生は真面目な顔で言います。「みんな立ってこらん」

子どもたちは言われるままに立ちますが、どうしてそうするのかわかりません。

「では、今からキレイでもいいです」

子どもたちはキョトンとします。先生が何を言っているのかわからないという顔です。

「といっても、腹が立つことがないのにキレイられないでしょう。そこで、今から1分だけタイムアウトを取ります。廊下に出てもいいです。1分経ったら授業を再開します」

そう言って先生はタイマーをセットし、椅子に座ります。

子どもたちは辺りを見回します。どうしていいのかと困っているのです。

5秒くらい経つと一人が座ります。すると、次々に座り始めます。そして、問題を解くことを再開します。

先生は座った子どもに「もういいの」と声をかけません。「時間前に座って偉いね」とほめることもしません。それは、キレイという「子どもらしさ」を尊重しないことになるからです。

さて、さっきのキレイな子どもが教室に戻ってきました。倒した机が元の位置に戻り、揃えてある勉強道具を見て、「先生、ごめんなさい」と頭を下げます。彼は教室に残った友達も「キレイなことを知りません」。

友達は彼がドアを開けたとき、「おかえり」という視線を向けたが、何もなかったかのような顔をして勉強に向かいます。